現代詩の鑑賞(下)

伊藤信吉

新潮文庫

現代詩の鑑賞
下巻

定価400円

新潮文庫 草204 B

昭和二十九年四月三十日 発行
昭和四十三年五月三十日 十九刷改版
昭和五十六年六月五日 三十八刷

著者 伊藤信吉
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

© 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社
© Shinkichi Itô 1954 Printed in Japan

新潮文庫

現代詩の鑑賞

下　巻

伊藤信吉著

新潮社版

364

序

これは近年のいちじるしい現象といってよいが、詩を読むひと、詩を作るひとの数は、一年ごとに多くなっている。明治の新体詩がうまれてから後、詩がこれほど多くの人々にむかえられたことは一度もなかったかもしれない。ところがその一方、現代詩は難解で分らないという意見も少くない。そしてたしかに現代詩には難解なところがある。

それならば現代詩を分らなくさせているのはなんだろうか。これは現代の私どもの生活意識が、しだいに複雑になったことに一つの原因がある。また詩の表現形態や構造が、昔にくらべて、比較にならないほど精緻になったことにも一つの原因がある。たとえば昔の詩人たちの作品は、一般に音楽的であり情緒的であった。これに対して現代の作品は、抒情詩でさえもずっと内面的に複雑化していて、ただ歌えばよいというものではなくなった。つまり現代詩は詩としての内質が、現代人の生活意識そのものによって変革されたのである。

この本の上巻で私は明治・大正の詩を鑑賞したが、この下巻ではそれ以後の時代——大正末期から現代にかけてあらわれた作品一二〇篇を鑑賞した。しかし難解といわれる現代詩を全面的に解きあかすには、もちろんこれだけでは十分といえない。現代詩の世界にはこのほかにもさまざまのタイプの詩人がおり、それぞれ独自の詩的表現を試みている。それゆえ最初は十数人の詩人を対象にする予定だったが、一人一人についての解説をおもい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きりくわしくしたため、この十人に止どめなければならなかった。他の詩人については別の機会に触れるつもりだし、ここに扱った十人だけでも、現代詩の性格がどういうものであるか、その理解を促すためにいくらかの役割をはたし得たとおもう。

現代の人々にとって、詩が欠くことのできない一つの糧となること。その希いにおいて、私は上下二巻にわたり二五〇篇の詩を鑑賞した。さらに未来にむかって、現代詩はあたらしい領域をひらくにちがいないけれども、そのための基盤となるこれらの詩と詩人を、その芸術的成果を、私は万人の手におくりたい希いをもつ。

昭和二十八年十二月

伊藤信吉

付記　この仕事に手をつけたのは昭和二十六年五月ころで、それから二カ年半が過ぎた。原稿紙にして千三百枚ほど。自分でもこれほどの量になるとは予期しなかったし、これほど時間がかかるともおもわなかった。この永い期間にわたって、はかどらぬ仕事を前へすすめてくれたのは、新潮社の佐野英夫氏である。その支えがなかったならば、中途で挫折したか、そうでなければ完成はもっと先の方へ延びただろう。ふかい感謝をもって、私はこの筆を終る。

目次

一、現代詩人の作品鑑賞（下）

宮沢賢治……一三

曠原淑女　善鬼呪禁　旅程幻想　作品第一〇六三番　小作調停官　作品第一〇八八番　雨ニモマケズ　作品第一〇二〇番　野の師父　春と修羅　半蔭地撰定　永訣の朝　松の針

尾崎喜八……六一

日の哀歌　日の暮　友　野の搾乳場　新らしい風　夜　夕べの泉　存在

金子光晴……九一

夜　湖畔吟　富士　三月　紋　落下傘　大埠頭にて　古い港に　自叙伝について　燈台　夕　蜆の歌

三好達治……一三九
雪　草の上　金星　昼　村　村　大阿蘇　湖水　鶏　牝鶏　牛　蝿
の羽音　黄葉　頬白　雪景　故郷の街　蝉千里浜　一点鐘二点鐘
鵯どり　灰色の鵯

中野重治……一八八
北見の海岸　しらなみ　浪　雨の降る品川駅　歌　噴水のように　夜明
け前のさよなら　大道の人々　無産者新聞第百号　その人たち

草野心平……二三〇
天の一本道　中華民国の藍に就て　上小川村　寂　無題　秋の夜の会
話　ぐりまの死　訪問　蟬のるりる　富士山(第肆)　正倉院符孤文銀
壺　原子　止まらない時間のなかを　天道虫

北川冬彦……二七四
馬　秋　花の中の花　瞰下景　絶望の歌　砂埃　氷　壊滅の鉄道　戦
争　いやらしい神　桔梗　風景　瓦斯工場裏手　路地　雑草　引揚
げの人　顔　泡
中原中也……三一七
砂漠　朝の歌　臨終　頑是ない歌　言葉なき歌　除夜の鐘　曇天　サ
ーカス　骨　北の海　含羞
立原道造……三三
はじめてのものに　のちのおもひに　夏の弔ひ　或る風に寄せて　晩秋
午後に　旅人の夜の歌
西脇順三郎……三七七
皿　天気　雨　太陽　旅人かえらず　冬の日　磁器

二、現代詩の展望（下）

現代詩の成立点……四〇二
アヴァンギャルドの詩運動……四〇五
プロレタリア詩の発展……四〇八
現代詩の全面的な展開……四一二
戦争と詩的個性の問題……四一七
戦後詩壇の概観……四一八

現代詩の鑑賞

下卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

現代詩人の作品鑑賞（下）

宮沢賢治

数人の詩人の作品を手にとってみればすぐ気づくことだが、現代の詩人たちの生活意識にはさまざまの差異や段落があり、その文学理念もさまざまに分れている。おなじ現代詩という概念に包括されているけれども、そこにはほとんど類縁のない、いくつかの文学性格が並んでいる。たとえばある詩人は徹底した自我の世界に住み、ある詩人は社会的・政治的な視点に立っている。そうかとおもうと他の詩人は、独自のフォルムの形成をめざして、次々にあたらしい試みを積みかさねている。これは現代詩の世界が、そんなにも多様化したことにほかならないが、その中でも宮沢賢治の文学は、特異な詩的性格を成していたということができる。

三十八年の生涯を通じて、実践的な生活者としての態度をとっていた賢治は、狭い意味での詩人という概念にはつつみきれないような、幅と深さのある文学世界をひらいた詩人のひとりである。いわゆる詩的意識だけではなくて、もっと幅のひろい、一つのコスモス（宇宙）というべきものがその生活圏を形成した。したがってこの詩人の作品の表裏には、現代の私どもにとっての生き方の問題が、さまざまの色合いで語られている。そのゆたかな生活の振幅にともなって、作品もまた特色のあるいくつかの断面をみせている。

曠原淑女

日ざしがほのかに降つてくれば
またうらぶれの風も吹く
にはとこやぶのうしろから
二人のをんながのぼつて来る
けらを着粗い縄をまとひ
萱草の花のやうにわらひながら
ゆつくりふたりかすゝんでくる
その蓋のついた小さな手桶は
今日ははたけへのみ水を入れて来たのだ
今日でない日は青いつるつるの蕈菜を入れ
欠けた朱塗の椀をうかべて

朝の爽かなうちに町へ売りにも来たりする
鍬を二挺たゞしくけらにしばりつけてゐる
のでは
曠原の淑女よ
あなたがたはウクライナの
舞手のやうに見える
……風よたのしいおまへのことばを
もつとはつきり
この人たちにきこえるやうに云つて
くれ　……

この詩は数多い賢治の作品のなかにあっては、あまり目立つことのない小篇の一つにすぎないだろう。しかしたとえ小篇であっても、この詩人独得の風趣や生活意識がよく出ている。「曠原淑女」というのは作者の造語で、これにはユーモラスな心意がふくまれている。場所はたぶん岩手県の農村だろうが、その地方の農村にはたらく女性や、いま眼の前の曠原にあらわれた

女たちを、作者はことさらに淑女という言い方をした。それははたらく人々によせる親和感に発しているのであって、このように親密な感情を、どことなくユーモラスな言いまわしに盛りこんだ言葉は、賢治の詩や童話のいたるところに見うけられる。この親和感が全篇にながれているために、その女たちと作者とは、あたたかい気持のこもった方言で、互いになんということもない話をしているかのようである。詩の表面にはひとことの会話もないけれども、ぜんたいの感じのなかに、方言の会話があるかのように思える。

この淑女たちがどういう身なりをしていたかというと、「けらを着粗い縄をまとひ」というように、労働の姿そのままである。都会の人には「けら」といっても分らないだろうが、これは藁で作ったいかにも不細工な雨具で、ちょっと亀のような形をしている。厚ぼったくて重たい。それを合羽やマントのように着るので、雨の日の農家の労働には欠くことができない。「粗い縄」は荒縄とみてよい。身につけたケラがばたばたするので、荒縄を帯のように巻きつけたのにちがいない。こういう労働の扮装をした女たちを「曠原の淑女」といったのである。

だがこの「曠原の淑女」という言葉は、ケラと荒縄だけではまだ完全には成立たない。これには「萱草の花のやうにわらひながら」「ウクライナの舞手のやうに見える」などの美しい意味もふくまれている。ケラと荒縄をまとった女たちは、その地味な労働の姿にもかかわらず、花のようにあかるく、舞手のように好ましい。それらのすべてがよく釣合い、曠原の情景にマッチしたところに、作者はしたしい気持をそそる女たち——曠原の淑女をみた。このユーモラスな造語には、この詩人の健康な生活意識があふれている。

あかるい陽ざしが降りそそいだり、少しつめたい風が吹いたりする曠原。そこの「にはとこやぶのうしろから」二人の女たちはこちらへのぼってきた。（「にはとこ」はすいかずら科に属し、山野に自生する落葉灌木）手桶をさげ、鍬をしばりつけて「萱草の花のやうにわらひながら」のぼってきた。なんという健康な美しさにつつまれた女たち。それはウクライナの舞手のようで、いつ見てもいきいきとしている。作者はこのはたらく女たちにしたしい思いをよせ、そこに「……風よたのしいおまへのことばを　もつとはつきり　この人たちにきこえるやうに云つてくれ……」といったのである。

『宮沢賢治全集』に付けられた註解によると、東北地方の婦女子の服装は、ウクライナ地方の舞手の服装によく似ているとのことである。（ウクライナはドニェプル河を中心に黒海に面した地方で、農業牧畜がさかんである。ソヴィエト連邦の一部を形成する）いわば小篇にすぎないこの一篇には、健康な生活意識が曠原の風のようにあかるくながれ、しかもそれが独得の風趣で表現されている。

「曠原淑女」のような作品は、ひろくは農民文学の一篇に数えてよいのであって、ここに賢治の生活意識の一側面がよくあらわれている。もう一つこの側面から延びていった次の詩。

善鬼呪禁

なんぼあしたは木炭（すみ）を荷馬車に山に積み　こんな月夜の夜なかすぎ
くらいうちから町へ出かけて行くたつて　稲をがさがさ高いところにかけたりなんか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com